

梅栽培
梅利用

類總て春を待ずして開くもの皆早梅也、されど梅譜に重陽日親折之といふ說あれば、是八朔梅の類にも有べし。

古今要覽稿草木八朔梅。

八朔梅は八月朔日ごろよりさきそめて、冬至にいたり多くひらく、故に玄か名付しなり、西國にては寒紅梅といふ本草大和といへり、何人のいつ頃よりいひ出し名にや、そのはじめを玄らす、花房正矩園中百種梅の中に、古巣といへるは、八月頃よりさき、八重なりといへば、今いふ處の八朔梅ならんに、その名をあげざれば、當時いまだ知人まれなりしにや、和漢三才圖會にものせず、松岡玄達は八月より二月にいたる一名からくなゐるといふといひ、品梅譜春田久啓は八朔ころより一二輪さきそめて初春にいたるといへり、また一種八九月頃と初春と二度さく花に八朔といへるあり、

〔廣益國產考八〕梅を植て農家之益とする事

諸國に梅を植置詠とするは實をとるにあらず、梅の艶しきを賞翫するのみなり、又實を賞し梅干とするは、珍花を撰ばず、實大粒にして肉厚く、核ちひさきを植る事也、いつの頃よりか大坂近邊に治左衛門と云梅は、花薄紅の八重にして艶はしく、紅梅の八幡といへるもの、開口に同じくいと見事也、大坂に便宜よき所は、註文して取寄植給ふべし、池田部の部といへるは、植木を作りて諸國にひさぐを業とする一村也、扱此梅は梅干として出さざれば益にはなるべからず、浪花にては是を何千石といへる程干して小き樽に詰江戸へ送る事夥し、近頃遠州相良にて大坂の通に小樽詰にして送るに、一廉益を得るよし、扱此梅干に製し様あり、梅の熟し過たるは园れて費となれば、少し赤味をして堅き時とりて、酒の古樽に梅壺斗に鹽三升のわりに漬、おもしを玄つかり置、六月土用中におもしをとり、水を玄たみ干べし、干様はほし場に砂ぼこりの來らざ